

時間貧困からの脱却を 支援するビジネス

時間貧困を解決する 第一の方法

世界の先進諸国で「時間貧困」という言葉が話題になりつつある。時間にはあらゆる場所のあらゆる人間に平等に一日二四時間付与されているはずであるが、実際は平等ではない現実が拡大し、時間が不足している人々が増大しているというのである。富裕な人々は金銭を支払って他人の時間を入手することが可能であり、一般の人々の何倍もの時間を使用できる一方、金銭で自分の時間を売却した人々は時間貧困になる。

自動車王H・フォードの有名な逸話がある。高等教育を享受していないのにさまざまな素晴らしい技術開発ができるのは何故かという記者の辛辣な質問に、フォードは自分の机

上の多数のボタンを紹介し、それぞれのボタンの先方には優秀な人間が待機しており、信号を送信すれば部屋に到来し、どのような課題にも対応すると説明したのである。金銭を支払うことによって自分の時間の何倍もの時間を利用していることになる。

しかし、インターネットが登場し事態は一変した。通信距離と使用時間に料金が依存する電話と相違して、インターネットは距離と時間に関係しない世界均一の料金体系での情報交換を可能にしたのである。現在、インターネット内部には膨大なウェブサイトが存在し、利用最大の「グーグル」には一日六〇億回以上のアクセスがある。多数の人々がフォードの雇用していた識者とは桁違いの人数を無償で使用しているこ

とになる。

時間を収奪する サブスクリプション

ところが世界の人々に時間と情報を提供してきたインターネットが時間を収奪する手段として利用されるようになってきた。サブスクリプションと総称されるサービスである。元来は月額や年額の料金を支払って新聞や雑誌を購読する場合に使用されていた言葉であるが、最近では定額で毎月一定の枚数の衣装が利用できるサービス、一定の時間の授業が受講できるサービスなどへと分野が拡大している。

最大の分野は音楽の「スポティファイ」「アップル・ミュージック」、動画の「ネットフリックス」「ディズニープラス」、書籍の「キ

ンドル・アンリミテッド」「ブックパス」などを代表として、インターネットを経由してコンテンツを自由に視聴できるサービスである。これらの音楽や動画を提供するサブスクリプションの売上は、日本の場合、五年前の二九〇〇億円から最近では五三〇〇億円と一・八倍に増加している。

それを正確に反映しているかは確実ではないが、日本で二〇一六年から二〇二〇年までの五年で、テレビジョン視聴時間、ラジオ聴取時間、新聞閲読時間が減少した一方、インターネットを利用する時間は一日につき一〇〇分から一六八分と一・七倍に急増している。その時間すべてが映像のサブスクリプションに充当されているわけではないが、前述のサブスクリプションの売上げの増加から推察すると、一定の相関関係はあると推察できる。

モモが解決した 時間貧困

ここでドイツの作家M・エンデの

『モモ』を想起したい。ある都市に灰色の服装の人間が登場し、人々に時間を節約して時間貯蓄銀行に貯蓄すると利息が増加すると宣伝する。多数の人々が時間を貯蓄した結果、会話や交際が減少して社会は無味乾燥になっていく。映像のサブスクリプションは時間貯蓄銀行に類似している。五年で一・七倍になったインターネット利用時間は、人々が画面に集中し、会話や交際が減少したことを推測させる。

エンデの小説に登場する正体不明の少女モモは、時間貯蓄倉庫を解放して凍結されていた時間を解放し、社会は以前の活気ある状態に回復する。OECD（経済協力開発機構）は余暇活動や気分転換の時間が平均の六割未満の人々を「時間貧困」と定義しているが、過去三〇年間で大半の先進諸国で比率が増加している。その有力な原因が、一定の金額を支払えば自由に音楽や映像を享受できるサブスクリプションに収奪されているとも推測できる。

このサブスクリプションが象徴す

るのは、人間が受身に技術と対応していることである。膨大な数量のコンテンツから選択できるとはいえ、所詮は一定の枠内での選択である。

しかし、これから登場するウェブ三・〇社会では、人々は受身ではなく自身が主体となって情報を管理することが可能になる。重要なことは時間泥棒から自身を保護するモモの役割をする思考である。そのためには人間と情報技術の関係の再考が必要になる。

掃除ロボットは廊下を巡回して自動でゴミを収集していくが、豊橋技術科学大学で開発されたゴミ捨て箱の形状をした掃除ロボットは、ゴミを発見するとそこで停止して、通行する人間にゴミの存在を合図するが、自分では処理しない。仕方なく人間がゴミをロボットのカゴに投入する。これは役立たない技術のような存在になる。このようなモモの役割をする技術やビジネスが重要な時代である。

東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男



昭和一七（一九四二）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究する。とともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。